**平成２７年度第１回鳥取市社会福祉審議会**

1. 日時　平成２８年２月１８日（木）　午後１時３０分～午後３時１０分
2. 場所　鳥取市役所本庁舎６階　議会全員協議会室
3. 出席者（審議会委員）松浦委員、山根委員、前田由委員、岸本国委員、渡辺委員、金築委員、　　岸本勝委員、前田妙委員、安木委員、塚田委員　（欠席者：竹森委員、木下委員）

　　　（事務局）高齢社会課・中央保健センター

1. 会議（１）開会

　　（２）あいさつ

　　（３）委員紹介

　　（４）会長・副会長の選任

　　　　　　　会長　　松浦会長

　　　　　　　副会長　山根副会長　に選任を行った。

　　（５）会長・副会長あいさつ

　　　　　　　　（司会；新会長）

　　（６）議事

　　　　　①第３期鳥取市健康づくり計画「とっとり市民元気プラン2016」について

　　　　　中央保健センター　説明

（会長）　はい、ありがとうございました。５年に１度の計画づくりということで、この５年間で、今第３回目になりますね、長くて１０年間ですね、健康日本２１の理念のもとに、鳥取市のほうで取り組んできてる。その効果も徐々に上がりつつあるなあというふうな印象を持っているんですけれども、全国平均と比べたときにいろいろと、まだ鳥取県で問題点の多い項目もちらほらと散見されるような気もいたします。今後のプランにつきまして、今のところ市民政策コメントもいただいているんですけれども、特に大きく矛盾、この計画と矛盾する、大幅な修正をしなくちゃいけないという点はないようにも感じておりまして、こういったコメントの一つ一つを吟味しながら、政策実行に反映させていただける部分があるというふうに感じているところであります。

それでは、どんな順番でも結構なので、この計画について、あらかじめ見ていただいているところもあるかと思いますので、それぞれの御感想を述べていただければありがたいのですが、何かございませんでしょうか。はい。Ａ委員、お願いします。

（Ａ委員）　子どものことについて、保護者の方とも意見交換ですとか、子どもたちの話もいろいろと聞かせていただくことも多々あります。この中で、まず１つが子育てに楽しさを感じる人の増加というところで、保護者の立場からの部分があると思います。年々ふえているというところで、もちろん子育ては楽しいということはあるんですけれども、生活習慣とか職業の多様化ということで、必ずしも土曜日や日曜日が休みではない御家庭も多々あります。その中で、なかなか、楽しいけれども、子どもたちにあまり携わってあげることができないというような御家庭とかもありまして、そのあたりを地域全体ですとか、社会全体で何かしらのことを考えていっていただきたいなというのがあります。それと同じようなことですけれども、子どもの立場から見たときも、大人が、これは何かしてあげようかなといったときに、受けている子どものほうが、そこまで楽しくなかったりもやっぱりあるそうです。もうちょっとこうしてくれたらいいのにな、ああしてくれたらいいのにということもあるそうなので、そのあたりも子どもたちがどういったものが楽しいのかというようなことで、また、いろいろと意見を聞いていただいて、反映していただけたらありがたいなというふうに思っております。以上です。

（会長）　今の御意見ですね、まず、２３ページですか、地域全体で子育てをしましょうというところから、２４ページにかけて、いろいろな数値目標等が書いてあるのですが、私の感じでは、４時間も１人でテレビとかゲームに没頭していられるのかなというところで、かなりこれは、５％以下にするのはいいんでしょうけれども、もうちょっと子どもらしい遊びが持てるような環境づくりというのができないのかなというふうな感じはいたします。今のＡ委員のお話ですと、地域全体で子育てをする、あるいは、子どもさんへの働きかけに対して、子どもさんが充実した気持ちを持てるといったような取り組みがもっとないものかというようなことだと思うんですけども、これについて具体的な取り組みはどのようにしていったらいいかという御意見はないでしょうか。はい。お願いいたします。

（Ａ委員）　休みの土曜日とか日曜日とか、保育園とか休みだったりもしますし、小学校も休みだったりするんですけれども、なるべく保護者同伴だったらというわけでもないですけれども、安全に開放していただけたら、遊ぶところも確保できてありがたいなとは思ったりもするんですね。ある程度開放されているところもあるんですけれども、１００％でもなかったりもしますし、あと、大きく外で遊びましょうというようなことではいろいろと言われているんですけれども、公園でボールを使って遊んではだめですよとか、大きな声で騒いではだめですよとかなると、どうしても子どもたちは興奮し始めると、そのあたりの歯どめもきかないので、そういったところの改善をちょっと何かしらしていただけるとありがたいかなと思ったりもするんですが。

（会長）　そうですね、これはすごく大きな問題だと思っているんですね。最近、子どもたちの遊ぶ声が外で聞こえなくなっているということで、先ほどもお話がありましたように、学校の校庭とか公園が閉鎖されているという現状があります。これは地域の住民からかなり大きな声で、自分たちの権利っていいますか、それを守ってほしいという意見もありまして、なかなか行政としては調整が難しいのかなというふうな感じはしてるんですけども、それについていかがでしょうか。

（中央保健センター）　御意見ありがとうございます。どちらかといいますと、ここの計画は母子保健計画ということで、鳥取市といたしまして、２ページのあたりに関連する計画はございまして、子ども・子育て支援であるとか、施設の開放とか保育園とかのお話だとは思うんですが、公園とかという部分につきましてもボール投げであるとか、そちらの方の意見が出たことを伝えまして、対応をお願いする部分かと思っているところでございます。確かに今その５％、会長さんがおっしゃいました何時間も４時間以上の子どもを減らすというところですけども、実際アンケートで抽出したものでして、小学校で、正直なところを書いていただいているのかなと。いわゆる現状として、１人、両親がおられなくてご自宅でというようなことになっているのかなというのが推測されまして、そういった家庭環境という部分で、今学校のほうでは、放課後児童クラブとか、今度は高学年まで延びるような計画だというような計画で、これだけで家庭の計画の中でほかとの関連も含めて承った意見は、その部門にはお伝えしていきたいと考えているところです。

（Ｂ委員）　ちょっとよろしいでしょうか。

（会長）　はい、お願いいたします。

（Ｂ委員）　以前に保育現場にいた者として、最近の保育園の事情というのは、ちょっとわかりかねる部分もあるんですけども、地域で子どもたちが元気よく朝から遊んでいる姿っていうのは、公園がうちの近くにも２カ所ぐらいあるんですけど、本当に聞こえないんです。やっぱり親がついてないと危ないっていうようなことが地域的に言われたりすると、どうしても親がついてこれないから外には出ないでとか、それから留守が多いので子どもについていってあげれないからっていうようなことで。それと、地域的に子ども会っていうのも活動が随分なくなってきていて、活動が少なくなってきてる。地域的に私たちもそういうものがあったら何とかして協力したいと思うんですけど、やっぱりお母さん方が案外閉鎖的に、地域でどうこうっていうことになると、あんまり迷惑かけたくないとか、それから年配の者にいろいろ言われたくないっていうようなこともあるみたいで、もっと地域で子ども会っていうものの活動を活発にするような方向づけっていうのがあると、また地域に根ざした発展するような取り組みもできるんじゃないかなというのを、この間からいつも地域で私たちも集まっては話のついでには子ども会が、何か取り組みがすごく不活発になってきたし、年度の始めと終わりぐらいにちょっと集まってるとかっていうようなことだし、夏休みで地域の公民館とか何かの集会場を解放しようと思っても、やっぱり子どもだけでは行かせるわけにいかないとかっていうような危険を感じられるお母さん方もおられますし、何か地域だけでなくってそういう子ども会をもっと大きな軸にして活動できないものかなっていうのをちょっと感じているところなんです。

（会長）　子ども会というのは、各町内会の下にあるものじゃなくて、校区ごとにあったりとか、あとスポーツクラブであったりとか、いろいろありますね。

（Ｂ委員）　地子連とかで、地域でやっておられるのが鳥取市でのものとか、いろいろ役職も結構あるもので、お母さん方があまり活動すると、お勤めを持っておられる関係で、役はあまり受けたくないとか、いろんな活動をすると、それに全部関連して出ていかなきゃいけないというのが、お母さん方は負担になるみたいで、気持ちはあっても、活動がしにくいということで、地子連に出ていかなきゃいけん。それから、地域の子ども会の役員で集会すれば、それなりの取り組みがいる、前もって準備がいるというようなことで、どうしても負担が多くなって、共稼ぎの方も多いのですのでね。その辺がやっぱり何かネックになっているんじゃないかなって。地域で何とかそれがうまくこう私たちみたいな年配の老人クラブであったりとか、そういう何かこう何かかかわってしてあげたいなと思っても、なかなか、その心が開いていただけないというようなことがあるものですからね。何か、そういう地域ぐるみで何か子育てができるような方向というのがうたっていただけると、少しは糸口がつかめるんじゃないかなと思うのですけど。すみません。

（会長）　鳥取市の方に聞きたいのですけれども、最近、老人会の集まりとか、それから、いわゆるその子ども・子育ての集まりとかを複合した取り組みというのもあるのでしょうか。

（中央保健センター）　はい、どうぞ。

（Ｃ委員）　高齢者と子どもたちの交流事業というのが、それぞれ地区ごとで行われている地区もございます。お餅つきをされたりとか、一緒に手仕事とか、飾りとかお正月の飾りをなわれたりとかというような活動をしておられるところもございますけれども、どちらかというと、老人クラブの会員さん方は、どんどんいろんな形のいろんな事業をつくっていかれるのですが、子どもさん、子ども会側は、集落での小さい会だと、何かの形で活動をしておられると思うんですけれども、それが地区・校区になると、先ほどおっしゃったように、役員にならないといけないと、子どもさん自体も少なくなっていっているので、子ども会自体に加入をしていない世帯もございますし、地区の子ども会連合会、市の子ども会連合会の中にも入ってない地区も、地域も、実際、今４１ありますけども、地子連加入は多分３０数地域になっていますので、子ども会の組織自体も校区にないところも、ここ最近になって、特にふえているというのが現状かと思います。

（会長）　そうですね。私が住んでいる栄町というところも、マンションが結構あるのですけども、そういったところの方は子ども会に入っていないとか、とはいっても、もともといらっしゃる方の中で、子どもさんって本当に数えるほどしかいなくて、子ども会がないといった状況があります。そういったところで、どうやって、よそのお子さんをお世話できるような関係づくりをつくっていくかということを、地域に働きかけていくといったことが、これからの課題になるかと思います。この点について、何かほかに御意見ないでしょうか。はい、お願いいたします。Ｄ委員。

（Ｄ委員）　私、鹿野のほうに住んでおりまして、鹿野というのは、人口が４，０００人弱ぐらいの小さなまちなのですけれども、地域にまちづくり協議会というものがありまして、そこがいろいろと、例えば、この間だったら節分に豆まきをして、一緒に巻き寿司をつくりました。そこに、地域の中にあります鳥の劇場さんも参加していただいたりして、結構、小さいまちではあるのですけれども、そういう取り組みがされているのですね。それで、鹿野もやっぱり高齢者がたくさんおられて、子どもの数よりもお年寄りの方のほうが多い状況ではあるのですが、でも、どうしてもお年寄りだけの家族で、子どもたちがいらっしゃらない御家族もあるんですけれども、そういうおじいちゃん、おばあちゃんが、やっぱり子どもたちをとてもかわいがってくださるというか、どうしても地域性はすごいあるのかなというふうには感じます。それから、私のほうも施設に勤めておりますので、施設で働く職員は、２４時間勤務しておりますので、先ほどありました、土曜日、日曜日をどう過ごすかというところでは、私たちも現場で働く職員の、少しでも子育てを応援したいなということで、かなり勤務を調整したりとか、それから、お盆とか、お正月とか、家族がそろうときは、できるだけそういう２４時間の勤務を少し楽にするような取り組みだったりとかもしているんですけれども、やっぱり核家族がふえてきておりますし、それから、お母さんだけの家庭、お父さんだけの家庭も状況的にはふえてきているのかなというところに、このデータだけでは、家庭が、この子どもたちが過ごす、毎日過ごす家庭の基盤がどういう状況なのかなというのがなかなかちょっと見にくいので、この数値だけで、じゃあこうしたらいい、ああしたらいいというのはちょっと見にくいかなとは思うんですけれども、そういう地域性がすごく大きいのかなというところと、それと先ほど出ていました、学童保育というのも、今、鹿野は３年生までしか利用ができなくて、４年生以上はやっぱりスクールバスで送り迎え、クラブ活動をされている子どもさんいらっしゃるんですけれども、そうでない子どもさんはスクールバスで送っていくっていうような形で、誰もいないおうちに帰る子どもさんもやっぱりいらっしゃるんですね。そういうところでは、もう少しその家庭の状況に合わせて、３年生までとかではなくて、臨機応変に、家族の働いておられる環境とかね、お母さんたちが少しでも、ちょっと心の心配というんですかね、そういうのが楽になるような、そういう子どもたちを安心して過ごせる、お母さんたちが帰ってこられるまで安心して過ごせる場所というものの確保が必要かなと。障がいを持たれた子どもさんたちも、養護学校が卒業した、終わった後に、放課後デイといって、障がいのある子どもたちさんがお母さんが帰ってこられる６時だとか７時ごろまで預かってくださるデイも段々とできておりますので、やっぱりそういう福祉ですね、そういうものの充実が今の地域の家庭の状況に合わせた、やっぱり子どもを守る環境というのをその年というか、時代、時代に合わせたものをつくっていかなきゃいけないのかなというふうに思います。

（会長）　はい。いろんな取り組みが実際にされているということもわかりましたので、そういったものをこれから大切に育てていきたい、いかなきゃいけないなというふうに思っているところであります。これに関連してのことになるかもしれませんけれども、評価指標でこころの健康について、あまり成績がよくなかった、達成度が低かったということがございました。悩みがあっても相談する相手がいなかったりとか、相談する場所がわからない。例えば、資料を活用している人が少ないとか、近所づき合いがない人もまだ結構いらっしゃるといったようなことがございます。そういったことで、近所づき合いとこころの健康ってある程度相関しているのではないかと思われるんですけれども、こういった点についてもう少し、悩んだときにはこうしたらいいよというふうな働きかけも大事になってくるのかなというふうには思っておりますが、渡辺先生、いかがでしょうか。

（Ｅ委員）　はい。ありがとうございます。確かにこの評価指標を見ると、そこにもう少しいろいろなつながり、地域の中の横のつながり、住民の方々、あるいは、四世代を超えたつながりがもう少し活発になればというような思いで見させていただいたのですが、先ほどの安木委員さんのお話の中で、非常に参考になったのは、鹿野町は、かつて鹿野町と独立した町だって、鳥取市に編入されて、鳥取市の古くからある市とまた違うのかもしれませんが、特にこういう地域づくりというのは、結構活性化してうまくいくと、こういうこころの健康づくりにもすぐに相談できる人というのが身近にできてというような、みんなつながっていくと思うんですが、地域づくりがあまり活性化してないと、つながりが薄くなって孤立したり、相談する人がいないというので、さっきより、どんどん取り組みを活性化すると、やはり不特定に向かっていい効果が出てきているように思うんで、その点、鹿野町は、随分と地域づくりの協議会でボランティア的な草の根的な活動として継続されたり、鳥の劇場のように演劇の活動をする、何かとこうコラボレーションとなったりとか非常に参考になったんですが、鹿野町、例えばこれは公民館活動の一環としてやっておられるような部分なんでしょうけども、地域づくり協議会というのですね。

（Ｄ委員）　鹿野にありますまちづくり協議会はＮＰＯ法人です。

（Ｅ委員）　では、公民館の活動とはまた別の形になるわけですね。

（Ｄ委員）　そうです。

（Ｅ委員）　鳥取市には、古いほうの支部には、同じような活動というのはあるでしょうか。

（中央保健センター）　はい。合併しまして、鳥取市で６１の公民館がありまして、その単位ごとにまちづくり協議会っていうのはできております。そこの協議会の活動は、鹿野の例にもございましたように、児童と高齢者との交流であるとか、その地域に根差したいろいろな活動をされております。例えば、気高のほうでは、健康問題ということでアンケートをとられて、まちづくり協議会がそういった活動をされている部分もあります。その地域地域でいろんな課題に対してやっておられるということであります。

（Ｅ委員）　その地域によって活動の温度差というか熱心なところとあまりそうでないところとかなり差が出て、鹿野町とか気高町、伝統的に非常に活発であってるということですね。恐らくこのアンケート調査なんかも、少し全体を分析するときに、もう少し公民館単位であるとか、中学校単位で少し細部を分析をされると、何かまた対策が見えてくる可能性があるかもしれません。例えば鹿野町で同じ健康指標を評価したら、全体の数値よりも中にはよくなってくるような可能性もあるかもしれませんし、そのあたりがいろいろな政策的なフィードバックにつながっていくのではないかなあと。

１つ、２つ別の話題で質問させていただいてよろしいですか。健康づくり、生涯通しての健康づくりの健康寿命の延伸というところがあると思います。ちょっとお待ちください。健康寿命と平均寿命の差は、冒頭でお話しされた健康寿命と平均寿命をできるだけ接近させて、健康寿命を平均寿命に近づけるというようなことは非常に健康づくりの重要なテーマだと思いますが、３８ページであったと思います。健康寿命の評価の仕方っていうのは、なかなか複雑だと思うんですが、ＷＨＯからも世界の健康寿命の統計を毎年ではなくて５年に１回ぐらい統計のほう出している中で、日本全体の健康寿命はもうちょっと短かったような、ちょっと記憶が正確ではないかもしれませんけど、もう少し国全体の健康寿命は短かったように思うんですが、全国の健康寿命と鳥取県の健康寿命の比較はなさっているでしょうか。

（中央保健センター）　はい。３８ページのところでございますが、全国、県の指標は、厚生労働省のほうが算式に基づいて、実はばしっと出しております。下のほうにもちょっと注の米印の２のところですけども、市町村単位で出す場合に、ちょっと出しにくくて、県のほうが逆に、要介護２以上を健康でないというふうに定義して、介護保険のほうから要介護度との比較でちょっと出した数字でございます。平均寿命は単純に市町村単位で出るんですけど、健康寿命っていうのはちょっと算式が難しくて、それから、集団母数が多くないと出ない。確かに全国、県、これより低うございます。それで、出し方が違う点でその差がですね、例えば国、県に行けば５歳ぐらい離れているんですけど、これで行くと２歳弱ぐらいになっております。その出し方の問題もあるんですけども、全国と比べては、指標のつくり方は違うんですけども、イメージでものを言うのはなんですけども、若干高いのかな。平均寿命も全国と比べては、高いようであるということでございます。

（Ｅ委員）　国際比較をするときの、全国、日本の健康寿命っていうのは、恐らく他の国の介護保険の要介護度っていうのは、日本独自のものを使っているのを指標に入れると、ちょっと他の国のデータと直接は比較はできないでしょうけど、感想だったり、少し健康寿命の出し方もあわせて少し全国の差異であるとか、海外のデータとの差異も少し分析の中に多少は考慮して作成はしますね。

（中央保健センター）　平成２０年ごろだと思うんですけども、全国の統計が出てまして、それによりますと、鳥取県の健康寿命は、３１位とか３３位とかっていうですね、上のほうではなかったと思います。要介護１までは健康なのかという問題はあるんでしょうけど、一応このような定義で出しているというようなことでございます。

（会長）　ほかに取り上げておきたい話題はございませんでしょうか。はい。Ｅ委員、お願いします。

（Ｅ委員）　こころの健康に関連しての鳥取市で若い人の自殺、自死が多いのが当面の課題であるということだと思います。対策に関して、いろいろ４７ページも、それから４８ページも対策も挙げていただいていますが、市町村における自死対策は、恐らく自殺対策室、大綱が改正をされて、市町村に義務づけられるようになると思いますし、鳥取県の心といのちを守る県民運動という対策の会議をしてまして、市町村の取り組みの事例も少しずつ発表して共有したりもしてますので、そのあたりも少しこの対策に施策に参考にされるといいと思います。ちなみに、先週の水曜日に委員会が開かれましたが、境港市が学校保健とコラボレーションするような形で、市の保健師と学校の養護教諭、あるいはスクールカウンセラーと連携するような、あるいはアンケートを行って、学校の心の検証するというような、現状を把握するとか、境港はそういう活動をして発表をしとられましたので、境港、あるいは、県の健康政策課、どちらかで少し資料を取り寄せられて参考にされるといいと思いますし、国も少しガイドライン出してくると思いますので、ぜひ参考にしていただいたらと思います。

（中央保健センター）　わかりました。

（会長）　いのちの電話とか、ちょっとした悩みについても、相談ができるような窓口をもっと周知できればいいなというふうに考えているところであります。お酒とかたばこについては、何か御意見ないでしょうか。毎日お酒飲む人、結構いらっしゃるとかですね、そういうことについても、鳥取県でも鳥取市の特徴なのかなと。それから、糖尿病対策というのももちろん、結構、鳥取市の方々では目立つところもあるということですし、生活習慣病に対するリスクをもう少し啓発していくという努力は、これからも進めていかなければいけないなというふうなことであります。

（Ｆ委員）　４６ページに、ゲートキーパーっていう言葉があるんですけれども、私も何かこれで見て初めて知った言葉なので、何かよくわからない、認識してないんですけれども。

（Ｅ委員）　私のほうでちょっとお答えしましょうか。自死対策というのは、孤立して鬱状態になればなるほど、精神的な考えの幅が狭くなって、自分の悩みを解決するにはもう逃れられない、苦しみから逃れるには死を選ぶしかないという、だんだんと狭く、考えが狭くなって、誰かに相談しようと思っても、その相談するアイデアも浮かばなかったりということで、できるだけ早い段階で身近な人に相談をして、何らかのやはりその人に解決を、答えを求めるんではなくて、その人に相談することで考えを整理したり、その人がまた、次のやはり適切な支援の人につなげてあげるというような、門番というような意味がゲートキーパーという意味なんですけど、閉ざされた心を開いて、少し次に何かつなげてあげるような門番のような役割で、身近にそういうゲートキーパーという心の悩みとか心のストレスに対することで悩む人の支援、理解をある程度知識を持ったり経験を持った人をできるだけ多くして、鬱を予防、鬱の初期の段階で支援を行ったり、あるいは適切な、やはり会長が言われたようにいのちの電話であるとか、あるいは、本当で危ない、こう死にたいという気持ちで向かっている人は、医療機関であるとか、あるいは保健師、あるいは民生委員のような身近な生活の関係に相談する人とか、何か適切にサポートする、支援する人につなげてあげるような方、あるいは身近で少し悩みを聞いてあげるっていうような役割の人をゲートキーパーといって、その人の心を開いていろんな解決に、あるいは支援につなげていくように支援するっていう人の意味で使っております。

（Ｆ委員）　そういう人が鳥取市には何人いらっしゃるんですか。

（Ｅ委員）　ゲートキーパーの養成は、精神保健福祉センターの原田所長のところが中心になって、職場であるとか、職域あるいは地域でやってまして、今年何人になっているでしょう。

（中央保健センター）　これまで年次的にですね、社協職員であるとか、それから鳥取市役所の窓口に来られるタイミングでということで窓口職員とか、それからいつだったか民生児童委員を対象にしたりとか、輪をだんだん広げてまして、何人ということではないんですけども、講習を受けて、先ほどＥ委員がおっしゃられたように、築いて次につなげていかれる方っていうんですかね、そういうことを養成するということで、過去何年かずうっと毎年やっておりまして、受講者は１００や２００ではないということでございます。ちょっと数字は今申し上げられませんけれども。

（Ｅ委員）　認知症のサポーターは講習に際して、オレンジリングっていうのをもらって、それは何人オレンジリングを発行したか、渡したかの統計があるんですけど、そちらは、もしかしたらそういうあまり集計を明白にしてないかもしれませんし、同じ方が重複して講習受けられることもあるでしょうから。ただ、実際にやはり、こういう政策を忠実に数値目標を持って進められるんでしたら、ゲートキーパーが大体どれくらいおられるかというのは、ちょっと把握しておかれることが大事かもしれません。

（中央保健センター）　はい。

（会長）　はい。今の御質問ですけども、私の理解ではゲートキーパーというのは、普通の名詞だと思ってたんですね。誰でもゲートキーパーになれるなっていうふうな。

（中央保健センター）　そうです。

（会長）　思っていたのですけれども、確かにそういう資格ってあるんだなってことを、今、この場で初めて知りました。そういった、ですから、ゲートキーパーという言葉を全く知らない人が８７．２％いますという、そういう、この「ゲートキーパーという言葉を知ってますか」という質問をする意味というのは、あまりないんじゃないかなというふうな印象をちょっと思ったんですが、せっかく統計とってくださってるので、今さら文句言うつもりはないのですが、言葉はともかくとして、そういう方が身近にいらっしゃればいいなあということで解釈すればいいのかなと。あまり言葉というのは、どこかで聞いたことがあるなっていうのも、それも知ってるうちに入るのかもしれないんですけれども、どういうものか正確に知らなかったからといって、それはそれであまり支障ないのかなと思ったりもしました。

（Ｂ委員）　今の話とはちょっと別の問題になるんですけれども、子どもたちの健康、それから高齢者の健康というのを考えたときに、子どもたちにはやっぱりいろんな形でお母さん方に教養講座があったりとか、お話しする機会があったりってことがあるんですけど、高齢者に対して今、社協のほうを通して、地域でそれぞれお弁当づくり．配食サービスというのを行っていますよね。それがやっぱり鳥取市というか、まちなかというのがなかなかボランティアの養成というか頼む人がいなくなっている。介助してあげたいんだけど自分たちだけが精いっぱいで、新しい方を引っ張り込んで、若い方を引っ張って何とか活動していきたいっていうのが大変今ネックになっていまして、できることなら私たちももらいたいぐらいだから、もうやめたいっていうようなことが、いろんな地域でお話聞くんです。現在、私たちもこの高齢者の中で配食サービスを担当して頑張ってはいるんですけども、もらわれる方も「月にたった１回だな」って言われる方もありますし。それから、何か都合が悪いときにもらいたくてもらえないときには、迷惑かけるからやっぱりやめとこうかとかいうような形で何か配食サービスというのがいろんな形でマイナス面になってきてるような部分というのが今、私たちの中でちょっと公民館でも話ししたんですけど、何かほかのとこでは、そういうことに対して、社協が一生懸命頑張って予算をくださって頑張ってはいるんですけども、地域的に何か無理がきている部分もあるし、それからお互いが高齢化し過ぎて活動に入れないって方もありますし、その辺については、市のほうとしての取り組みとか、それをもうちょっと広げていくとか、何かほかの方法にするとかっていうようなそういう方法を考えておられるでしょうか。何か助けていただきたいです。

（会長）　配食サービス、意義は認めながらも、維持していくのは難しいということですよね。

（Ｂ委員）　広げたいんだけども限界があって、ボランティアがだんだん減ってくるんですよね。いただきたいって方はおられても、今度は配達する方も高齢者になりますし、これもずっととなり同士で出ているちょっとした話の中になるんですけど、いろんな悩みがありまして。おとといも出さしてもらい、いろいろ色彩とか、あと栄養とかっていうので、つくるほう側も負担だし、食べていただく方にはそういうバランスをとったものを食べさせてあげたいしってことがあるんですけど、ボランティアがだんだん減ってきているんですよね。その辺を何かうまい方法ってないんでしょうか。打開策ってありませんか。

（Ｃ委員）　どの地区もやはりぶつかる問題ではあるんですけども、実際、地域の何ていうか縁っていうかが希薄化してるってのも実際のところではあるんですが、それがまたずっと続くかっていったらそうではなくて、何かしらぽんとその新しく、じゃあ私たちでやってみようかっておっしゃる方が一人、二人出てくると、またそれが盛り返していくっていうのが、ここ何年もずっと続いているって形ではあると思います。ただ、まだまだお元気ですので、お互いさまでできる方ができるだけのことをしていただいたらいいんですって、よくボランティアさんにもお話をさせていただくんですけれども、地域によっては週１回しておられるところもあったりとか、ちょっと人数少なくなったので、月に２回にしといて、また多くなったら週１回に進めていこうかっておっしゃるところもありますし、そのあたりは、割と何か上手にボランティア仲間を引っ張ってきてくださる方が一人ぽんと出ると、多くなり。だから食事サービスをやめられたっていう地域はないですね。新たに月１回でも、二月に１回でもいいから、ちょっとやってみようかっていうところで進めていただいているところは多いです。何かちゃんとした返事じゃなくて申しわけないです。

（Ｂ委員）　いえ、私たちのところが今、グループとして１０班とか１２班とかってあったグループがだんだん減りまして、高齢化になってリーダーシップとる者がいないから、もうやめたい、やめたいで、今、５つか６つのグループになりまして、１グループが８人から１０人ぐらいが精いっぱいなんです。それに対して７０人から何人かの方の食事つくるので、つくり出したらできるんですけども、月にたった１回のことにすごくネックがありましてね。それで、よその地域とか聞いてみると、何か毎週のところもあるし、週に２回のところもあるって言われるのに、月にたった１回のことに何とか頑張らなきゃなって、今、現状としては頑張ってはいるんですけども、よその地域でそういう悩みを打開されたようなうまい方法とか、鳥取市としてのその打開策とか何かがあったらなと思っているとことです。提供食とか１５食のところもあるんですね。割と時間短くちょっと出かけられて、そこでもう配達する方にも食べていただいて、持って行ったときに声を聞くためには、食べてないのに聞いて帰ってもわかりませんと言われるのがあって、皆さんも一緒に食べたりするので、配達自体のお弁当は５０前後なんですけどね。

（会長）　あんまりわからないので基本的なことを聞きたいんですけども、ボランティアに頼らなければいけないような体制が今のところあるということで、ただ、月に１回とか、それはそれで意義のあることだと思うんですけども、じゃあ受け取る側の人は本当にそれを必要としてないかもしれないというふうな疑問もあるんですね。本当に例えば週に２回、３回って必要になってくる人っていうのは、そういうボランティアに頼るのではなくて、もっとマンパワーのあるところにお願いするべきではないかなというふうな認識を持ってるんですけれども、大体こう食事をつくるっていうのはすごいパワーがいりますし、それに責任問題も伴ってきますよね。ですから、やはり専門業者とか、あるいは行政とか、そういったところも一枚かんでいったほうがいいのかなっていうふうな気もしないではないんですけれど、これについて何か。

（Ｃ委員）　現在、多分しておられるのは、ふれあい型の食事サービスで、地域の中で地域のつながりを少し持ってもらいたいってことで行っていただいてる事業で、生活支援型の毎日の配食サービスっていうのは別途、はい、１食いくらで必要な方は申し込みをされて、業者が持っていかれるっていう事業もございます。

（会長）　ほかにございませんか。はい、お願いします。Ｄ委員。

（Ｄ委員）　こころの課題のところなんですけれども、鳥取県の４５ページの一番下のところで、自分で亡くなっていかれる方っていうのが、三十代がすごく高いですよね。鳥取の駅南に、若者サポートセンターというところがありまして、３９歳までの方たちのいろいろ相談に乗られたりとか、そこは鳥取子ども学園が国の事業でやっておられるのですけれども、そこ、窓口を訪れる方が、このデータから見ると少ないらしいですね、らしいというのはちょっと、すみません、十分に情報があってのことではないですね。

（会長）　そのとおりだと思いますね。この年代で自死される方っていうのは、ほとんど引きこもっていらっしゃって、もちろん結婚もしてないし、仕事にもついていらっしゃらないという方がほとんどだと思います。

（Ｄ委員）　ですので、そういう相談窓口というのが、知っておられる方があるのかどうかとか。先ほど、サインが出たときに、ちゃんとタッチができるようなところも、本当にすごく大事で、また地域の中にそういう相談窓口があるというところも、どうしても家族の方もどこに行ったらいいだろうみたいなところが結構あるのかなあって。そこの若者サポートセンターも国の事業で子ども学園がされていますけれども、あまり実績が上がらない、こんなこと言っていいのかなと思いますが、実際にいらっしゃる、相談に来られる方というのがあるんですけども、この実数から見ると、あまりぐんぐん上がっていないのかなあって。そこで行政さんとどうやって結びついていくのかなあ、そういう事業されているところと、どうやって行政が結びついていったらいいのかなあというところを、少しこれから考えていかなきゃいけないところかなあって思ったりもしますし、また、閉じこもりになっていらっしゃる方々を一生懸命声をかけて、好きなときに来ていいですよという場所を一生懸命地域でもつくっていらっしゃるところもあるのですね、実際。あるいは、家庭訪問をされたりとか、あと私の仕事の関係ですけれども、交通事故とか、高次脳機能障がいとか、元気だったんだけども、事故で思わぬ障がいを持ってしまって、なかなか地域の中に出るのが、できなくなってしまったとかっていうような方って本当にたくさんいらっしゃって、そういう方々をどこが把握というのも変ですけれども、見ていくのかなあってという。本当に、地域の力というのが、こういうところでも必要になってくるのかなあと思うのですけれども、そうやって頑張っておられる事業所もありますので、行政がそこでつながっていくことも必要なのかなというふうに思います。

（会長）　いろんな切り口に対して、いろんなテーマに対して、地域でやらなきゃいけないこと、行政に助けていただかなきゃいけないこと、それぞれあると思います。最近、私のほうでは、在宅医療介護連携推進協議会というのを立ち上げてまして、そこで、地域包括ケアという問題に取り組んでいるんですけれども、なかなかこれも地域の力がなかったら実際に進んでいかないというものでして。どこで各団体の方にお願いして、切り込んでいくのかというところ、非常に難しい問題があるかと。

（Ｇ委員）　少しずれるかもしれませんけれども、自分も元気で暮らしたいということが切実なキーワードになる年齢になりまして、日々いろんなことを考えておりますが、きょうのお話の中にも出てきましたが、子ども会とか、婦人会というようなものが長い間、地域で熱気を持って何か大きなパワーとして、長年地域、村の中にあったように思うのです、あるときまでは。それがいつのころからか、子ども会、婦人会というような熱気のある、力のある村の何か核って塊が崩れてきまして、そして、世の中がいろいろ変わって、社会が変わりましたので、当然なんですけど、じゃあそれにかわるようなものが何かあるかなあと思いますのに、ないんですね。まちづくり、まち協もできて活動しておられますけれども、何か今一つ、活性化しているところも、温度差はありますけれども、何かかつての団塊の世代である私たちがやってきた子ども会とか婦人会のパワーとは違うなあというようなことがありまして、この団塊の世代っていうのは日本特有の現象だそうですが、この団塊の世代が７０代に入っていくわけでして、その中で、この元気に暮らせるということが、本当に社会にとって切実なことになってくると思います。行政のほうにもいろんな窓口があり、地域でもいろんな活動を。私も幸い元気で、地域でいろんな活動をさせてもらっているおかげで、こうしていろんな会に出させてもらったりすることがすごく勉強になっていて、こういうことができなくなったらとっても寂しい人生になるなあと思いつつ、きょうの会合に出させてもらってるんですけども、何か自分にもよくわからないんですけれども、何かこう村というですね、一番小さい生活の単位の中に、何か欲しいなあと、活気というか、パワーというか、熱気というようなものが欲しいなあというように思っております。

（会長）　若い人に聞いてみましょうか。ソーシャルネットワークシステムとか、もっと活用したほうがいいってなこともあるでしょうか。

（Ａ委員）　はい。場所場所によっていろいろとあるんだと思いますし、私の地域はもうほんとにすぐそこに住んでるんですけれど、明徳小学校のあたりなんですけれども、子ども会も本当に活発に動いてますし、地域とも連携しながらしっかりと動いてますし、聖の祭りがありまして、それが２年に１回大祭ということで、そこでまた地域が１つになり、町内もまた１つ、校区的にも１つというようなことで、年が若いだ、老いているだとか、もうほとんど関係なく、ちっちゃい子はお囃子たたくし、７０歳、８０歳ぐらいの方も一緒に歩いて、歩ける範囲だけとりあえず練り歩いてとかっていうことではしてるんですよね。ただ僕、地元が用瀬なんですけれども、やっぱり一時期衰退してたそうなんです、自警団みたいな感じですかね、男の人間も少なくなり、若い人間が私みたいに出てしまったりすると。でも、結局地元に残っている若い人たちが一生懸命声をかけて、まあ、いいじゃないか、とりあえずやろうよということで、１人残っている人間が一生懸命声をかけて、何とか今、また大きな会になっているという話は聞いてるんですね。ということは、もう、声かけれる人間がとにかく声かけないことには、もうどうしようもないのかなと思うんです。待っててもしょうがないし、自発的に誰かが動いてくれるかってこともちょっと厳しいのかなあというふうに思ってたりもしますんで、コーディネーターみたいな方でも１人その地域に来ていただいて、一生懸命声をかけていただくというようなことが、もしも行政のほうからでも、誰か声かけ担当の方が来ていただけると、ひょっとすると何かが変わるのかなと思ったりしますけれど。

（会長）　きょうは社会福祉の話なんですけれども、地域の活性化というところではですね、鳥取市の方にも来ていただいて、例えば、空き家を利用して何か事業をやるんだとか、そんなアドバイスもしていただいたりしているという現状はあると思います。まだ御発言されてない、Ｃ委員はどうですか。

（Ｃ委員）　このたび、初めて参加させていただいて、こういう大きなプロジェクトがあるんだなっていうのを初めて見せていただきました。今、地域での活動について。うちは、国府町の中の神垣というところに住んでいるんですけども、ラッキーなことに、私たちの年代までの傘踊りのグループがあります。どうしても女性が中心になる、さっき婦人会が衰退しているっていうこともあるんですけど、そういう踊りのグループ、婦人会のグループ、お花のグループっていうのが３カ所重なっている人がほとんどなので、村の中での活動っていうのは、何かやろうっていうと、どこかで声が挙がっていて、おばあちゃんたち、お母さんたちが動けば、お父さんもおじいちゃんも動いてくる。そうなると子どもも出てくる。なので、年間の納涼祭だったり、文化祭だったり、このたび、いきいきサロンを立ち上げようとしているんですけども、それもやっぱりお年寄りの人が自主的に活動してたのを、やっぱり自主運営は難しいわ。御飯つくるのも、弁当頼むのも大変になってきたよっていうことで、じゃあ私たち、次期高齢者が立ち上がろうかということで、その話も３つの重なっている婦人会だったり、踊りのグループだったりっていうのが声かけして、お父さん方の年代を動かし、若い人も子ども会も巻き込もうというような感じで、今ちょっと楽しいことが起こりそうな村づくりになっています。ずっと前に聞いたことがあるんですけども、一つ一つの集落が活発になってくれば、そこの地域が元気になって、また町の単位で元気になり、鳥取市、鳥取県、そういうことで、どんどん広がって元気なまちができていくんだよっていうことも聞いたことがあったので、それをみんなが頑張ってやっているかなと。ただ、先ほどから出ています、子ども会が自治会から費用いただいても活動してないので、毎年繰越金がふえていますよっていうのが、今問題になっていて、子ども会やっぱり大事なことだよね。子どもが少なかったので、活動していませんっていうことでしたけど、今、小学生もふえてきましたし、子ども会をこれから何とか頑張れたらいいなと。今、Ａ委員のお話も、何か元気になるような感じで受けとめましたので、地域で頑張れたら国府町も元気になってきて、みんなが元気で暮らせるかな、楽しいことが起こるといいなっていうふうに期待しています。

（会長）　はい。ありがとうございます。Ｈ委員、お願いいたします。

（Ｈ委員）　今さっき、Ｄ委員が鹿野町出身で選出されていらっしゃるということで、大概のことは話されましたけど、鹿野町には３校区、元３校区、今１校区ですけど鹿野と小鷲と勝谷と、３地区がございます。それで公民館は、今現在３地区公民館が３カ所ございます。それで子どもの件ですけど、高齢者とこじか園ですか、こちらの交流も前田委員さんがおっしゃったとおり、年何回か餅つきから、節句から、こいのぼりからいろいろと活発にやっていらっしゃいます。それと、公民館としては、夏休み、子どもの居場所をつくるというか、勉強のお手伝いとか、そういう遊びとか、いろいろ各３地区ともに今やっています。私も勝谷地区の公民館を４年間ほど館長させていただきまして、そのときからずっと継続して今でもやっていらっしゃると思っています。それと子ども、利用者は、これから高齢化が進んできてます。少子化ではありますし、当然健康でない方以外は、もう考えないけないと思います。健康でない方は、私たちだけでないけど、障がいがだんだん近くなってくると、今、要介護のおっしゃったように、何か２以上は、結果の１、２以上が健康範囲以内だとおっしゃいますけど、そういうのにだんだん近づいてきていますし、そういうことも含めたら、各地域の協力を得て、子ども会にせよ、それからそういう団体の会、老人クラブの団体とか、鹿野町はたびたび新聞、ＤＭ等で、町並みの森林、森林って実際のこれは違いますので、鹿野がいいところかなとは思っています。大体それぐらいのことで終わらせていただきます。

（会長）　最近、各まちの昔からあるいい特長をもっともっと積極的にアピールしていこうといった取り組みもされているようですので、それぞれの方がそういったものを、仲間をつくって活動していくという取り組み、これから少しずつでも起こってくるんじゃないかということを期待しています。

（中央保健センター）　はい。ありがとうございます。いろいろ御意見いただきまして、祭りであるとか子ども会、それから老人、それから分析の話もございました。そういったことを具体的に今後、これは５年間の計画ですけども、これを受けて、今度は予算化して、毎年毎年いろんなことをしていくということで、実は中央保健センターが所管している中で、地域づくり推進員さんとか、それから食育推進員とかを各地域にもおられます。それを同じように活性化の問題を抱えておりまして、きょういただいた御意見参考に、祭りであるとか、さっき国府の子ども会中心に、お母さんが動けばみんな動くというようなところも、そこの働きかけとか、目に見えない部分でそうすれば、いわゆる健康になってくるという部分もございましょうしということで、そういった御意見いただきまして、実際、これを来年度以降、２８年度以降実行に移すときの参考にさせていただいて、計画としては、多少分析とか、そういう御宿題をいただきましたけども、よろしいでしょうか。その確認をさせていただきたいと思うのですけど。

（会長）　それでは、このとっとり市民元気プラン２０１６ですが、案につきまして、原案どおり賛成していただける方は挙手をしていただいてよろしいでしょうか。挙手をお願いいたします。

（中央保健センター）　はい。ありがとうございます。

（会長）　全員挙手ということで、この案は承認されたというふうにさせていただきます。

（中央保健センター）　はい。ありがとうございます。

（会長）　きょうの議事につきましては、これで終了させていただきます。

　７．閉　会（１５時１０分）